

東京都 健康長寿医療センター 研究所NEWS

東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）

No.282 2017.9

Index

遠藤玉夫副所長日本学士院賞受賞記念 特別講演会及び祝賀会のご報告	吉田英世先生 追悼	6
研究トピックス	所内研究討論会レポート	6
第146回老年学・老年医学公開講座 レポート	競争的資金の採択状況	7
老年学最前線	第147回老年学・老年医学公開講座 開催予定	8
	主なマスコミ報道／編集後記	8



第146回老年学・老年医学公開講座 (P.3)

遠藤玉夫副所長日本学士院賞受賞記念特別講演会 及び 祝賀会のご報告

遠藤玉夫副所長が日本学士院賞を受賞した（「研究所 NEWS」No.280 掲載）ことを記念して、6月30日（金）池袋ホテルメトロポリタンにて「遠藤玉夫副所長日本学士院賞受賞記念特別講演会及び祝賀会」を開催しました。

当日は遠藤副所長から「糖鎖から見た筋ジストロフィー」、共同受賞者である神戸大学戸田達史教授から「福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明」についての特別講演会が行われ、今回の日本学士院賞受賞までに至る経緯や恩師の先生方との会話なども交えつつ、専門的な内容をわかりやすくお話しいただきました。会場には、当センター職員、研究機関関係者など200名を超える方が聴講し、熱心にメモを取っている先生方の様子も窺えました。

また、特別講演会後に開催された祝賀会には、多くの参加者から祝辞・激励のお言葉があり、更には各研究機関の方などとの意見交換がなされました。168名と多くの方々にご参加いただく中、会場には日本学士院賞受賞の賞状・メダル、授賞式の写真、また受賞に対して日本基礎老化学会大会からの理事長特別表彰の盾が展示され、盛大な会となりました。

※ 6月12日（月）日本学士院会館にて天皇皇后両陛下ご臨席のもと授賞式が開催されました。



（報告者：広報普及係長 多賀谷 章生）

日本学士院賞受賞研究について

副所長 遠藤 玉夫

本年第107回日本学士院賞を「福山型筋ジストロフィーを含めた糖鎖合成異常症の系統的な解明と新しい糖鎖の発見」という研究題目で神戸大学戸田達史教授と共同受賞しました。その研究内容について紹介します。

福山型筋ジストロフィーとは

福山型先天性筋ジストロフィー（FCMD）は、1960年福山幸夫博士によって報告されました。筋ジストロフィーに加えて、目や中枢の異常も伴う常染色体劣性遺伝病であり、起立・歩行機能を獲得することが無い最重症型で、日本では先天性筋ジストロフィーの中で最も多い疾患であり、厚生労働省の指定難病です。

戸田博士は、FCMDの原因遺伝子フクチンを分子遺伝学的手法により同定し、本疾患の遺伝子診断、出生前診断、そして正確な病型分類を可能にしました。その後同博士によって、遺伝子異常の発生するメカニズム、スプライシング異常の詳細が明らかにされました。しかしながら、遺伝子産物フクチンの機能は依然として不明でした。

糖鎖とは

糖鎖は文字どおりグルコース（ブドウ糖）のような糖が鎖状につながったもので、私たちの体を作る重要な分子です。糖鎖はDNA/RNA、タンパク質など生命が使う鎖の仲間であり、重要な働きをしています（図1）。しかしながら、糖鎖は複雑な構造をしていることや、取り扱いが難しいことなどからあまり日の目をみないことが多かったのですが、ABO式血液型を決めているなど古くから重要性は認識されていました。最近の糖鎖分析技術の進歩により、がんなどの疾患、ウイルス感染、抗体医薬など研究の進展が目覚ましい分野となりつつあります。

O-マンノース型糖鎖の発見と筋ジストロフィーとの関連

私たちは筋タンパク質 α -ジストログリカン（ α -DG）の糖鎖を分析して、哺乳類においてO-マンノース型糖鎖（O-Man型糖鎖）を初めて発見しました。さらにその合成に関わる糖転移酵素 POMGnT1 遺伝子を

単離し、この酵素が FCMD に類似した筋ジストロフィーに加えて、目や中枢の異常も伴う常染色体劣性遺伝病である muscle-eye-brain 病（MEB）の原因であることが戸田博士との共同研究によって明らかにしました。つまり、 α -DG は POMGnT1 による糖鎖修飾の標的であり、MEB は α -DG の O-Man 型糖鎖不全による疾患であることを解明しました。

私たちの発見は糖鎖合成異常が筋ジストロフィーに係わることを示す初めての例となり、私たちは「ジストログリカン異常症」という疾患概念を提唱しました。この研究は大きな注目を浴び、「糖鎖と筋ジス」という新たな研究領域が創成される契機になりました。また、MEB は FCMD の類縁疾患であることより、FCMD も糖鎖に関連するのではないか、との考えに到りました。

福山型筋ジストロフィーは新しい糖鎖の合成異常

私たちはさらに研究を進め、FCMD は糖鎖異常であり、その原因糖鎖はリビトールリン酸が二個つながった構造であることを明らかにしました（図2）。哺乳類におけるリビトールリン酸を含む糖鎖の初めての発見でありました。リビトールリン酸はこれまでグラム陽性菌の細胞壁成分であるタイコ酸を構成することしか知られておらず、人体での報告はありません。リビトールリン酸を含む糖鎖の哺乳類での発見は、糖鎖の構造化学および機能的な役割、さらに糖鎖の進化と保存という観点からも大きな注目を浴びました。

さらに、私たちはリビトールリン酸糖鎖を作り出す酵素の同定にも成功しました。すなわち、最初のリビトールリン酸を転移させるのはフクチンであり、二個目のリビトールリン酸を転移させるのは FKRP（fukutin-related protein）であることを明らかにしました（図2）。FKRP も FCMD の類縁疾患の原因であることが知られていました。

おわりに

ゲノム医学・臨床遺伝学と糖生化学という異なる分

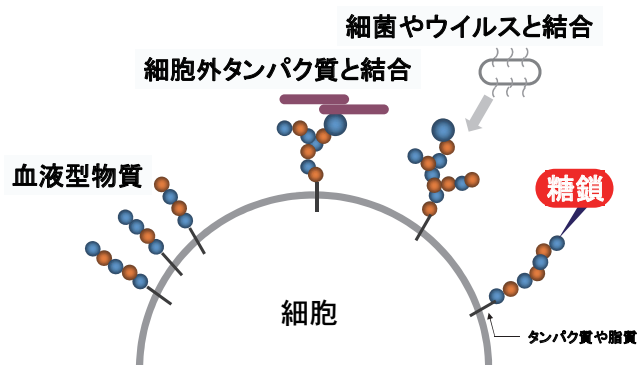


図1. 糖鎖について

糖鎖はDNA/RNA、タンパク質とともに生体を構成するバイオポリマーである。タンパク質や脂質に結合し血液型を決めるなど多様な生理作用を担う。また、糖鎖はがんやアルツハイマー病などの疾患とも関連する。

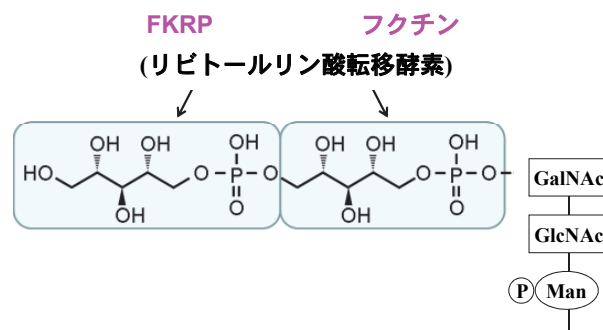


図2. 福山型筋ジストロフィーの原因糖鎖
(人体で初めてリビトールリン酸を含む糖鎖の発見)

福山型筋ジストロフィーの原因遺伝子産物であるフクチンの機能を同定した。糖鎖に最初のリビトールリン酸を転移させるのはフクチンであり、二個目のリビトールリン酸を転移させるのはFKRP (fukutin-related protein) であることを明らかにした。リビトールリン酸とは図中で薄い青色で囲んだ部分である。GalNAc、N-アセチルガラクトサミン；GlcNAc、N-アセチルグルコサミン；Man、マンノース；P、リン酸。

野を専門とする私たちの共同研究は、FCMD およびその類縁疾患は糖鎖合成の異常による疾患であることを明らかにし、FCMD の病態解明への道を切り拓きました。その結果、これまで人体で報告のないリビトールリン酸のタンデム構造を含む糖鎖の形成不全が、FCMD およ

び類縁疾患の本態であることを明らかにしました。新しい糖鎖の発見およびその生理的な意義の確立は、生体物質である糖鎖の存在意義を一段と高めました。さらに本成果は、不治の難病、筋ジストロフィーに対する根本的な治療法開発に寄与することが期待されます。

第146回老年学・老年医学公開講座レポート

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 大須賀 洋祐

6月2日（金）、練馬文化センターにて146回目を迎える老年学・老年医学公開講座が、練馬区後援のもと開催されました。当日は、719名の方にご参加いただきました。

今回は「認知症、でも大丈夫」をテーマとし、1) 当センター脳卒中科部長 金丸和富より「認知症の予防法」、2) 神経画像研究チーム研究部長 石井賢二より「認知症の治療・予防薬」、3) 自立促進と介護予防研究チーム研究部長 栗田圭一より「認知症になった後の対策」について、それぞれ認知症を前向きに捉えるメッセージが発信されました。認知症という言葉を知ると、心配や不安といった悲観的な気持ちを抱くことが多いと思いますが、今回の講座を聞いて、いくつか認知症の予防策や、認知症になっても地域の中で自分らしく生きることへの希望が見えてきたのではないのでしょうか。

参加者の質疑応答では、

質問①：社交ダンスは認知症の予防に効果がありますか？

質問①の回答：社交ダンスには、様々な要素（運動、音楽、対人コミュニケーション）が含まれていますので、認知症予防の効果が期待できます。

質問②：高齢期になり、気持ちがふさぎ込むことが多いのですが、何か良い対処方法がありますか？

質問②の回答：難しい質問ですね。毎日の生活の中で小さな楽しみを見つけて、それを実行することで小さな幸福を感じながら過ごすことではないでしょうか。

など、日常生活での具体的なアドバイスを求める質問がなされ、演者がわかりやすく、丁寧に回答されていました。次回の老年学・老年医学公開講座は、10月3日（火）に開催します。沢山のご参加をお待ちしております。

幹細胞の非対称分裂における脂質研究

老化機構研究チーム 研究員 今江 理恵子

平成29年1月より、老化機構研究チーム・分子機構の研究員として着任いたしました今江理恵子と申します。当研究所に来る前は、東京大学薬学部にて、脂質の生理機能についての研究を行っておりました。今回はその研究内容のうち、幹細胞の非対称分裂におけるリン脂質の役割について明らかにしたことを紹介させていただきます。

生体膜の構成成分としての脂質

脂質というと、肥満で蓄積する悪いもの、というイメージがあるかもしれませんが、脂質には生体にとって欠かせない、重要な働きがあります。脂質には大きく分けて3つの働きがあり、①細胞、あるいはミトコンドリアなどの細胞小器官を形作る膜である「生体膜」の構成成分としての働き、②脂肪燃焼によるエネルギー源としての働き、③細胞内や細胞間で情報を伝達するためのシグナル分子としての働きです。これらの働きにより、脂質は体内で起こるあらゆる生命現象に関わっていると言っても過言ではありません。そのため、脂質の異常は様々な疾患の原因となります。

生体膜はタンパク質と脂質で構成されており、このうち脂質は、リン脂質と呼ばれるリン酸を含む脂質がその主成分です(図1)。リン脂質は、水に溶けやすい親水性の部分(リン酸基を含む構造)と、水に溶けにくい疎水性の部分(脂肪酸)から構成されており、生体膜はリン脂質の疎水性の部分の互いに向き合った二重層の構造をしています(図1)。リン脂質には非常に多くの種類があります。例えばリン酸基の隣には、ビタミン様物質であるコリンや、アミノ酸の一つであるセリンなど、様々な構造が結合したものが存在します。また脂肪酸の部分においても、結合している炭素の数や二重結合の数の違いにより、エイコサペンタエン酸(EPA)やドコサヘキサエン酸(DHA)など、様々な種類の脂肪酸が存在します。このような親水性と疎水性のそれぞれの構造が組み合わされて多様な構造が生じ、生体膜には数千種類のリン脂質分子種が存在すると言われています。このようなリン脂質は、生体膜を構築するためのパーツであるだけでなく、生体膜に存在するタンパク質の機能を調節し

たり、特定のタンパク質と結合することで、そのタンパク質を生体膜の表面に呼び寄せたりするなど、様々な役割があります。

ホスファチジルイノシトール(PI)と非対称分裂

リン脂質のうち、リン酸基の隣に糖の一種であるイノシトールが結合したものをホスファチジルイノシトール(PI)と呼びます(図1)。PIは生体膜リン脂質の5%ほどしか存在しない比較的量が少ないリン脂質ですが、イノシトールがリン酸化されることにより、細胞増殖や細胞の運動性など、様々な生命現象を制御するユニークなリン脂質です。通常、リン脂質には様々な種類の脂肪酸が含まれるのですが、PIに含まれる脂肪酸はとても特徴的で、ほとんどがステアリン酸とアラキドン酸という、2種類の脂肪酸のみで構成されています(ステアリン酸は炭素数18、二重結合数が0の脂肪酸、アラキドン酸は炭素数20、二重結合数が4の脂肪酸です)(図1)。しかし、なぜPIがこのような特徴的な脂肪酸組成を持つのか、その生物学的意義はほとんど分かっていませんでした。

私は線虫をモデル生物として解析し、PIにステアリン酸が含まれるために必要な酵素を初めて見出しました。線虫は最も単純な多細胞のモデル生物で、シンプルな体構造や解析のしやすさから、神経系や寿命など、生物界に普遍的な生命現象を対象とした様々な研究分野で用いられています。このような線虫を用いて、PIを合成する過程でステアリン酸を含むために必要な酵素として、リン脂質を切断する活性を持つホスホリパーゼである*ipla-1*と、リン脂質に脂肪酸を結合させる活性を持つ脂肪酸転移酵素である*acl-8*, *acl-9*, *acl-10*(哺乳動物では*Lycat*)を同定しました。これらの分子を欠損した線虫では、PIに含まれるステアリン酸の量が顕著に減少し、上皮の幹細胞における分裂パターンに異常を示すことで、幹細胞と分化細胞の割合が変わってしまうことが分かりました。本来幹細胞は、非対称分裂と呼ばれる、性質の異なる2つの細胞を生み出す細胞分裂によって、元の細胞と同じ幹細胞(自己複製能)と、分化して

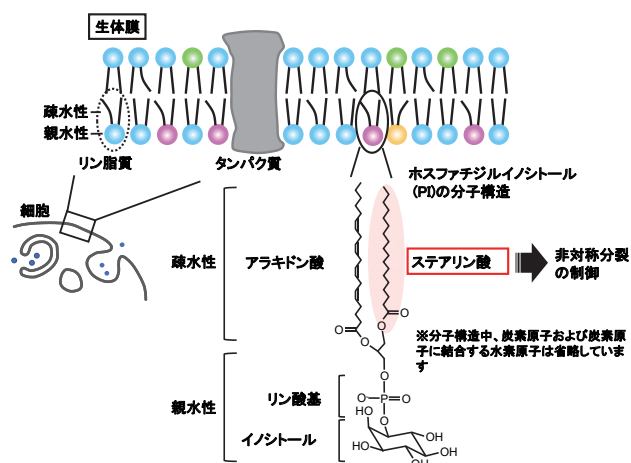


図1. ホスファチジルイノシトール (PI) の脂肪酸組成と非対称分裂

組織形成に寄与する細胞を生み出す（分化能）ことで、組織形成を制御しています。上記の結果から、PIに結合するステアリン酸は、上皮幹細胞の非対称分裂の制御に重要であることが分かりました。これは、PIの特徴的な脂肪酸組成の生物学的意義を見出した初めての知見です。

近年、生体膜中のリン脂質分子はランダムに存在しているのではなく、ある領域に特定のリン脂質分子が集まるなど、偏りのある存在パターンを示すことが分かってきており、タンパク質が効率的に機能するのに重要であると考えられています。また、リン脂質を構成する脂肪酸の組成は、こうしたリン脂質の生体膜中での存在パターンの制御に重要だと考えられています。私は、PIに含まれるステアリン酸の量が減少すると、PIが生体膜中の適切な場所に存在できなくなることで、本来PIによって制御される、非対称分裂に重要なタンパク質の機能が減弱し、非対称分裂の異常が引き起こされたのではないかと考えています。

幹細胞の非対称分裂とがん

幹細胞は、受精卵が分裂、分化して個体が発生していく際に多様な細胞を生み出す役割があるほか、成熟した組織においても存在し、失われた細胞を補って組織を維持する役割があります。その際、幹細胞の非対称分裂は適切に制御され、幹細胞と分化する細胞の比率がコントロールされています。一方、近年、幹細胞の非対称分裂とがんとの関わりが示唆されています（図2）。幹細胞の非対称分裂に異常が生じると、一般に幹細胞そのものを2つ生み出す「対称分裂」の割合が増え、結果として未分化な細胞が増えます。未分化な細胞は分化した細

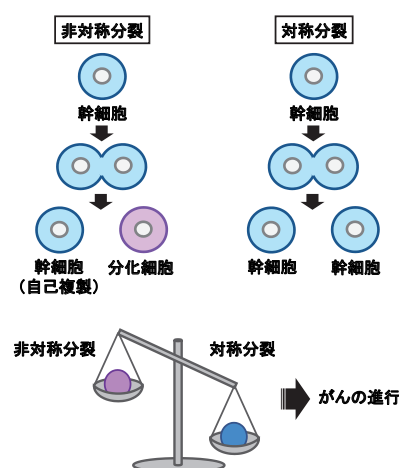


図2. 幹細胞の非対称分裂とがん

胞と比べて増殖速度が早い傾向があるため、幹細胞の非対称分裂の破綻はがんの進行の一助になると考えられます。これまで、幹細胞の非対称分裂のメカニズムはタンパク質分子を中心に研究されてきていますが、本研究により、生体膜のリン脂質の組成も重要な制御因子であることが分かりました。脂質は様々なタンパク質分子の局在や働きを制御できることから、脂質をコントロールすることにより、非対称分裂を適切に制御できる可能性も考えられます。これにより、がんにおける新たな治療法の開発につながることも期待されます。

今後の抱負

最後に、今後の抱負について簡単に述べさせていただきます。超高齢社会を迎えた日本において、認知症などの老化に伴って発症リスクが高まる疾患に対する予防・治療法の開発は急務であると考えています。また、老化は全ての生物に共通して訪れる現象であることから、生物に保存された、老化に対する応答機構があるのではないかと考えています。私は、糖鎖と呼ばれるグルコースなどの糖がいくつも鎖状につながった構造に着目し、老化やそれに伴う疾患が引き起こされる新たな分子機構を明らかにしたいと考えています。糖鎖は、細胞膜の表面に存在するタンパク質などに顕著に結合しており、糖鎖の構造が変わると、タンパク質の機能や他の分子との結合などが大きく変わります。また、糖鎖は細胞の状態に応じてその構造を変化させることも知られています。このように、糖鎖は生命現象や疾患を理解する上でとても重要です。私は、老化およびそれに伴う疾患における糖鎖の役割を研究し、病態のメカニズムの理解や有効な治療法の開発へつなげたいと考えています。

吉田英世先生 追悼

桜美林大学 老年学総合研究所所長（大学院教授） 鈴木 隆雄

自立促進と介護予防研究チーム元研究部長 吉田英世先生におかれましては、平成28年8月31日に急逝されました。享年54歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表するものであります。

吉田先生は岐阜大学医学部をご卒業後、同大学大学院に進学し疫学・公衆衛生学分野の研究者の道を歩まれ、平成4年に同大学院を修了され医学博士号を取得されました。

その後、平成6年10月に東京都老人総合研究所（現東京都健康長寿医療センター研究所）疫学研究部に主任研究員としてご就任され、それ以来二十年以上にわたり主として地域高齢者の健康増進や老年症候群の予防に関する疫学研究を着実に進めると同時に、当研究所の疫学研究部を支えてこられました。当時、私は疫学研究室長として着任間もなかったために、初めて吉田先生を研究員としてお迎えしました。当初は本当に二人三脚で各地での高齢者の健康調査やデータ分析、論文作成という研究活動はもちろんのこと、疫学研究室の整備、運営など忙しい日々を過ごしたものでした。そんな中であって、吉田先生の研究室のマネジメント能力、研究デザインの立案とデータ分析の能力、そしてなにより地域高齢者の健診に伴う膨大な準備と実施を、先生特有の細かな配慮でご尽力されました。疫学研究室から疫学研究部となり、数多くの研究成果が生み出されましたが、吉田先生無くては到底達成できなかったと思っております。吉田先生は私どもの研究部にはなくてはならない存在であったと、改めて心から感謝の意をささげたいと思います。

いつも穏やかで温厚な吉田先生の笑顔が心に残っております。吉田先生と一緒に研究できたことを誇りとして、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。先生本当にありがとうございました。安らかにお休みください。合掌。

所内研究討論会レポート

世話人：老化制御研究チーム 研究員 東 浩太郎

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 光武 誠吾

6月5日（月）、第19回所内研究討論会が開催されました。発表者より、当日の発表内容をご紹介します。

「ビタミンC欠乏マウスの骨格筋における表現型」

発表者：老化制御研究チーム 研究員 近藤 嘉高

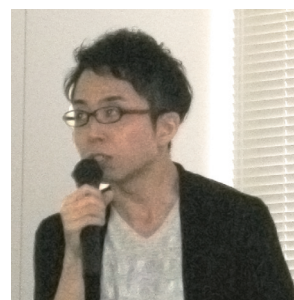
私たちは、栄養学的な取り組みによって、フレイルの予防や治療を目指しています。これまで、血中のビタミンC濃度が高い高齢女性は、握力や身体機能が優れていることを報告しました。今回の討論会では、ビタミンCが欠乏したマウス（SMP30/GNL ノックアウトマウス）を用いた実験で、①摂食量の低下と低栄養、②体重減少、③筋肉量や筋力、身体機能・活動量の低下といった、人で見られる身体的フレイルの特徴をあらわすことを報告し、討論しました。今後、ビタミンC欠乏によりフレイルが起こる機序を解明し、ビタミンC摂取によるフレイルの予防や治療に取り組みます。



「家族介護研究におけるダイアド分析」

発表者：福祉と生活ケア研究チーム 研究員 平山 亮

介護が必要な高齢者とその家族の関係は、それぞれの見方のズレが大きくなると、ごくしゃくすることが増えます。例えば、高齢者本人は「あれもこれも自分でできる」と思っているのに、家族はそう思っていない場合、「どんな介護がどれだけ必要か」をめぐる仲違いすることもあるでしょう。この研究では、そうした見方のズレがどんな場合に少なくなるのかを調べました。統計的な分析からは、まだ元気なうちによく話をしていたり、介護中にケアマネジャーによく相談に乗ってもらっているほど、そうしたズレが少なくなることがわかりました。



競争的資金の採択状況

(平成29年7月現在)

代表/分担	氏 名(所属)	研 究 課 題
平成29年度 厚生労働科学研究費補助金		
政策科学推進研究事業		
○	石崎 達郎(福祉と生活ケア)	医療費適正化に向けた生活保護受給者の医薬品処方および生活習慣病の実態調査：大規模レセプト分析
難治性疾患等政策研究事業		
○	田中 雅嗣(臨床検査科)	ミトコンドリア病の調査研究
○	村山 繁雄(老年病理学)	神経変性疾患領域における基盤的調査研究
○	村山 繁雄(老年病理学)	プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究
○	森 聖二郎(臨床研究推進センター)	早老症の実態把握と予後改善を目指す集学的研究
○	杉原 毅彦(膠原病・リウマチ科)	難治性血管炎に関する調査研究
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業		
○	新開 省二(自然科学系)	健康に与えるロコモティブシンドロームの影響に関する研究
長寿科学政策研究事業		
☆	渡邊 裕(自立促進と介護予防)	介護保険施設における利用者の口腔・栄養管理の充実に関する調査研究
☆	枝広 あや子(自立促進と介護予防)	要介護高齢者の経口摂取支援のための歯科と栄養の連携を推進するための研究
認知症政策研究事業		
☆	栗田 主一(自立促進と介護予防)	若年性認知症の人の生活実態調査と大都市における認知症の有病率及び生活実態調査
地域医療基盤開発推進研究事業		
○	石崎 達郎(福祉と生活ケア)	健診ガイドラインの担う新たな役割とその展望に関する研究
☆	石崎 達郎(福祉と生活ケア)	大都市圏における在宅医療の実態把握と提供体制の評価に関する研究
○	光武 誠吾(福祉と生活ケア)	大都市圏における在宅医療の実態把握と提供体制の評価に関する研究
平成29年度 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED)		
再生医療実用化研究事業		
○	豊田 雅士(老年病態)	糖鎖マーカーに着目した細胞の長期保存後における細胞特性の解析
次世代がん医療創成研究事業		
☆	井上 聡(老化制御)	がん関連RNA結合タンパク質複合体を標的とした革新的治療法の開発
難治性疾患実用化研究事業		
☆	上住 聡芳(老年病態)	遺伝性筋疾患に対する新たな高効率細胞移植治療法の開発
○	村山 繁雄(神経内科)	進行性核上性麻痺及び類縁疾患を対象とした多施設共同コホート研究によるバイオマーカー開発と自然歴の解明
○	村山 繁雄(神経内科)	剖検例を用いた、紀伊 ALS/PDC 診療ガイドラインの作製と臨床研究の推進
○	萬谷 博(老化機構)	CDP-リビートル補充療法の開発
○	田中 雅嗣(臨床検査科)	①新規バイオマーカー GDF15 の体外診断薬としての開発研究 ②ミトコンドリア病の生化学的解析・診断技術の開発 ③ミトコンドリア病の遺伝学的解析・診断技術の開発 ④ミトコンドリア病の診断・治療アルゴリズムの策定
長寿・障害総合研究事業 長寿科学研究開発事業		
☆	栗田 主一(自立促進と介護予防)	若年性認知症の有病率・生活実態把握と多元的データ共有システムの開発
☆	平野 浩彦(歯科口腔外科)	認知症高齢者に対する歯科診療等の口腔管理及び栄養マネジメントによる経口摂取支援に関する研究
○	増井 幸恵(福祉と生活ケア)	高齢者の自立度を測定する効果的調査票の開発と検証
○	渡邊 裕(自立促進と介護予防)	要介護高齢者半減を目指した日常生活動作指標の開発とテラーメイド型介入方法の検証
長寿・障害総合研究事業 認知症研究開発事業		
○	石井 賢二(神経画像)	各種のリガンドを用いたアミロイド PET および髄液 A β と、血液バイオマーカーとの定量的相関関係の解析
○	石井 賢二(神経画像)	適切な医療を目指した前臨床期アルツハイマー病および軽度認知障害等の患者の情報登録及び連携に関する研究
○	石井 賢二(神経画像)	プレクリニカル AD に対する MRI, PET 画像診断とバイオマーカー・遺伝子解析
○	石井 賢二(神経画像)	若年性優性遺伝性アルツハイマー病に関する多元的臨床データ収集と共有化による効率的な病態解明
○	金 憲経(自立促進と介護予防)	大都市部コホートの追跡調査から認知機能の維持者及び軽度低下者の登録と関連要因の探索
○	栗田 主一(自立促進と介護予防)	認知症の人の QOL 測定指標の妥当性およびその臨床応用の検討
○	伊東 美緒(福祉と生活ケア)	BPSD の解決につなげる各種評価法と BPSD の包括的予防・治療指針の開発～笑顔で穏やかな生活を支えるポジティブケア
循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	脳卒中後てんかんの急性期診断・予防・治療指針の策定
臨床ゲノム情報統合データベース整備事業		
○	村山 繁雄(神経内科)	認知症臨床ゲノム情報データベース構築に関する開発研究
○	新井 富生(病理診断科)	ゲノム創薬・医療を指向した全国規模の進行固形がん、及び、遺伝性腫瘍臨床ゲノムデータストレージの構築
革新的先端研究開発支援事業		
○	萬谷 博(老化機構)	機械受容応答を支える膜・糖鎖環境の解明と筋疾患治療への展開
脳科学研究戦略推進プログラム		
○	村山 繁雄(神経内科)	老化・認知症拠点の構築

☆：代表、○：分担

老年学・老年医学公開講座 開催予定 手話通訳あり・事前申込不要・入場無料

第147回老年学・老年医学公開講座

「高齢期こころ豊かに～百寿者からのメッセージ～」

- 1 『百寿者の世界』
大阪大学大学院人間科学研究科臨床死生学・老年行動学講座
准教授 権藤 恭之
- 2 『認知機能～百歳までと百歳から～』
自立促進と介護予防研究チーム研究員 稲垣 宏樹
- 3 『高齢期のうつとその対策』
精神科部長 古田 光

日 時：平成29年10月3日(火) 13:15から16:00まで
場 所：文京シビックホール大ホール（定員 1,800 名）
東京都文京区春日1-16-21
東京メトロ丸ノ内線・南北線 後楽園駅 5番出口直結
都営地下鉄大江戸線・三田線 春日駅 文京シビックセンター連絡通路直結
JR 中央・総武線 水道橋駅 徒歩 10 分

研究所ホームページ「耳寄り研究情報」を更新しました！

NEW 『認知症と暮らすお年寄りの美味しく楽しく安全な食を目指して』

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 枝広 あや子

URL http://www.tmghig.jp/J_TMIG/topics/index.htm

「耳寄り研究情報」で検索！！ クリック！

主なマスコミ報道

H29.6 ～ H29.7

老化脳神経科学研究チーム 研究部長 遠藤 昌吾

- 「逃れられない『老化』」
(ニュートンプレス「Newton」H29.6.26)

老年病態研究チーム 研究部長 重本 和宏

- 「逃れられない『老化』」
(ニュートンプレス「Newton」H29.6.26)

社会参加と地域保健研究チーム 研究部長 藤原 佳典

- 「りぶりんとかわさき 読み聞かせ活動 10 年～多摩地区で『三方よし』実現」
(タウンニュース社「タウンニュース」H29.6.30)
- 「『多様化するデイサービス』～世代間交流型と学校型」
(TBS「ビビット」H29.6.26)

社会参加と地域保健研究チーム 研究員 鈴木 宏幸

- 「いきがい就労の効果について」
(文京区民チャンネル「旬感！ぶんきょうタイム」H29.6.21～6.25)

社会参加と地域保健研究チーム 専門副部長 青柳 幸利

- 「高齢者の運動のしすぎと病気のリスク」
(講談社「週刊現代」H29.6.12)
- 「ウォーキングの新常識」
(テレビ朝日「羽鳥慎一モーニングショー」H29.7.17)

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 宇良 千秋

- 「『稲作プログラム』研究始まる 共同の作業 心豊かに」
(上越タイムス社「上越タイムス」H29.6.7)
- 「『生涯現役』50 歳の健康はじめ」
(世界文化社「家庭画報」H29.7.1)

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 岡村 毅

- 「『稲作プログラム』研究始まる 共同の作業 心豊かに」
(上越タイムス社「上越タイムス」H29.6.7)

自立促進と介護予防研究チーム 研究員 小川 まどか

- 「高齢者と趣味活動について」
(一般社団法人百歳万歳「エール」H29.7.1)
- 「認知症とともに暮らせる社会に向けた地域づくりについて」
(文化放送「ハート・リング健康 Radio」H29.7.16)

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 伊東 美緒

- 「相手目線で介護効果アップ…認知症ケア『ユマニチュード』」
(読売新聞社「読売新聞 web 版 ヨミドクター」H29.6.22)

福祉と生活ケア研究チーム 研究員 平山 亮

- 「『生きづらさ』を強調する『男性学』にかけている視点とは」
(週刊金曜日「週刊金曜日」H29.6.9)



今年の東京は雨が続き、テレビでは「8 月の連続降水日数の最長記録を更新するか？」といったニュースも流れ、折り畳み傘が手放せない夏になりました。一方、スーパーでは、心なしか冷や汗をかいているように見えるスイカの隣には、天候に変わらずに例年通り、モモやブドウ、ナシなどの旧盆時期に旬となる果物が並んでいます。夏と言えば、海やプール、スイカ割り、花火などがありますが、お盆の思い出も浮かぶのではないのでしょうか。幼い頃、お盆のお墓参りの際、迎え火を付けた提灯を持つことや、きゅうりやなすで精霊馬を作ることにはしゃいでいた頃の記憶を探ると、今は亡き人との繋がりを感じます。
(流星群)



平成 29 年 9 月発行

編集・発行：地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）編集委員会
〒173-0015 板橋区栄町 35-2 Tel. 03-3964-3241 FAX.03-3579-4776

印刷：コロニー印刷

ホームページアドレス：http://www.tmghig.jp/J_TMIG/J_index.html

無断複写・転載を禁ずる